やさしいまちに、なりたい。
回覧
2026.3　vol.52

郷土博物館だより

第33回企画展
「戸田市のあゆみ
～市制60周年をむかえて（仮称）～」

2026. 10/1（木）～11/15（日）

2026（令和８）年10月1日、戸田市は市制施行60年を迎えます。戸田市は、荒川下流域の低湿地帯にあり、現在では交通の便もよくマンションや倉庫が多く立ち並ぶ街ですが、古くは荒川での漁撈や渡船、農業等を行っていました。江戸時代にあった六つの村（上戸田村・下戸田村・新曽村・惣右衛門村・下笹目村・美女木村）は、1889（明治22）年の町村合併によって戸田村・笹目村・美谷本村となりました。その後、昭和の時代に入って戸田町・美笹村、戦後の1957（昭和32）年に戸田町となり、1966（昭和41）年には人口が５万人を超え、埼玉県で24番目の市となる「戸田市」が誕生しました。

今回の展示では、戸田市の変遷や市制施行に加え、2016（平成28）年以降に起こった特徴的なできごとである新型コロナウイルス感染症の流行や、東京2020オリンピック開催時における戸田市の取り組みなどを紹介します。また、お子様でも楽しめるような企画も予定していますのでどうぞお楽しみに。

◆目　次

第32回企画展レビュー …… 2
ロビー展レビュー、かけはし高校アート展 …… 3
講座レビュー、講座情報 …… 4
昔のくらし展レビュー …… 5
博物館授業 …… 6
文化財講座、アーカイブスセミナー …… 7
収蔵庫情報、お詫び …… 8

戸田市立郷土博物館

令和7年度企画展レビュー

第32回企画展「戸田と戦争」

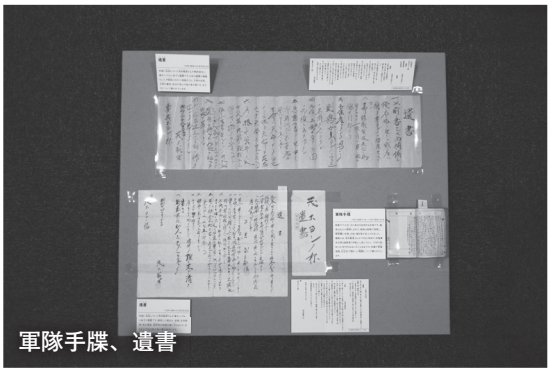
2025.8.2（土）～10.5（日）

本展示は、2025（令和７）年のアジア・太平洋戦争終結後80年の節目に合わせて行いました。年月の経過とともに戦争体験者は減少し、日本が中国（清国、中華民国）、ロシア（ソビエト連邦）、アメリカなどを相手に戦争をしてきた事実は、教科書や終戦記念日で見聞きする遠い過去のできごとになりつつあります。こうした状況を踏まえ、本展では郷土博物館で所蔵する戦争関係資料193点から、日本がどの戦争に関わったのか、兵士や戸田の人々が戦時中どのような生活を送ったのかを見ていきました。戦時中は日本中で物資が不足し、日常生活、教育、娯楽なども戦争の影響を強く受けました。戸田も例外ではなく、アジア・太平洋戦争では、戸田市域から出征した兵士のうち167名が戦死、150名が戦争による傷や病気で亡くなり、戸田市域も高射砲陣地などを標的とした空襲被害をたびたび受けました。戦争は兵士だけでなく、戸田に残された人びとにとっても「身近なできごと」だったのです。

「身近なできごと」と感じる資料の一つに手紙や日記、遺書があります。一例として、家族と離れて満州に渡り、日本に戻れなかった二人の手紙と遺書を紹介したいと思います。まずは18歳で親元を離れ、満州開拓青少年義勇隊となった少年が戸田の家族に送った多くの手紙。手紙には慣れない土地で頑張る様子が綴られると同時に、郷愁や家族への恋しさがにじみ出ています。もう一つは、1939（昭和14）年９月に満州敦化県寒葱嶺南方地区での戦闘で亡くなった下士官の遺書（同年２月に遺書、９月に補記を作成）。遺書が丁寧な筆跡で書かれているのに対し、亡くなる前日に書かれた補記では筆跡が乱れており、翌日以降に控える戦闘の激しさを予期させるとともに、家族を残して死ぬことへの心残りや、いたわりの気持ちも伝わってきます。

また、ロビーに設けた「戦争について伝えたいこと」コーナーでは、戦争に対するさまざまなご意見をいただき、来館者の皆様と共有することができました。本展示をご覧いただくことで、地元の過去の出来事を知り、同じ状況に置かれたら自分ならどうするのか、戦争を起こさないためにはどうすればよいかなどを考える機会となったなら幸いです。

展示風景


軍隊手牒、遺書

現戸田市域の空襲被害

ロビー「戦争について伝えたいこと」

令和7年度ロビー展レビュー

「端午の節句」2025.4.20（日）～5.6（火）／「桃の節句」2026.2.21（土）～3.8（日）

令和７年度のロビー展では、子どもの健やかな成長を願って昔から行われてきた二つの節句を取り上げました。１回目は、５月５日の「端午の節句」に合わせて、明治後期から平成初期ごろまでの五月人形、鎧飾り、手書き鯉のぼりを紹介しました。今ではあまり見かけなくなりましたが、昭和初期ごろまでは鎧兜や鯉のぼりのほかに、武者人形、馬、虎など男の子のお祝いにふさわしい力強さを表した人形を飾っていました。アンケートでは、日本人の手仕事の細やかさや、昔と今の人形の違いに気づかれる方もおり、興味深く観覧していただけたことが分かりました。

２回目は、３月３日のひなまつりに合わせて、戸田の女の子たちが大切にしてきた、江戸後期から昭和初期までの内裏雛と浮世人形を紹介しました。時代ごとに雛人形の大きさ、顔、衣装はさまざまで、女の子のお祝いならではの赤や金を多用したきらびやかな装飾が目を引きました。

また、幅広い年代の方々に楽しみながら節句の豆知識や戸田の風習について知っていただけるようミニコーナーを設け、多くの方にご利用いただきました。

鎧飾り（昭和30年代）

白馬（昭和初期）

内裏雛（江戸後期）

旭御殿・内裏雛（昭和初期）

かけはし高校アート展レビュー

2025.11.1（土）～11.12（水）

毎年恒例となりました埼玉県立戸田かけはし高等特別支援学校と連携して行うアート展。「アートミュージアム機能」の展開の一環として行っています。４年目を迎えた今回は、「缶課題」と題して、約20cm角の缶箱に彩色やデザインを施した作品を展示しました。制作に当ったのは、第２学年の生徒たち。展示作業を担当したのも、生徒の皆さんです。展示作業のために用意された紙の型枠にあわせて、四角い箱が整然と均等に並べられました。生き物や風景を描いたもの、お菓子の箱に見立てた物、色とりどりに採色されたもの、似顔絵やイラストなど、思い思いのモチーフで飾り付けられた56点の作品が展示室を彩りました。正方形の作品に収められた生徒一人一人の個性を来館者にご覧いただくことができる展覧会となりました。

展示風景

講座レビュー

「アンギンでコースターを作ろう!」

郷土博物館では、戸田市の小中学生を対象にした講座「子ども体験ひろば」を開催しています。今回は2025（令和７）年10月19日に行った、子ども体験ひろば「アンギンでコースターを作ろう！」の様子を紹介します。

講座では､「アンギン」はどういうものなのか､どう作るのか、という説明を聞いた後、実際に「アンギン編み」を体験しました。実は「アンギン編み」には、少しコツが要ります。最初は博物館の職員が補助をしていたのですが、だんだんとコツがつかめてくると、１人でも編めるようになっていました。

使っている道具は各ご家庭でも簡単に再現できるものばかりなので、講座に参加して、「アンギン編み」のコツをつかんでもらえれば、ご家庭でも楽しんでいただけるものになります。2026（令和８）年にも､子ども体験ひろば「アンギンでコースターを作ろう！」の開催を予定しておりますので、ぜひご参加ください。

コツをつかむまでは博物館職員が補助します

コツをつかめば、１人でどんどん編んでいけます

2026（令和8）年度講座開催予定

2026（令和８）年度は、以下の講座を開催する予定です。
※講座の回数、内容、開催時期等について変更する場合がございます。

	開催時期	時間	講座名	定員	参加対象
1	2026年6月21日(日)	①10：00～11：30 ②13：30～15：00	火おこしにちょうせん！	①20人(10組) ②10人	①小学1～3年生の児童と保護者 ②小学4年生～中学生
2	2026年8月23日(日)	10：00～12：00	まが玉を作ってみよう！	15人	小学3年生～中学生
3	2026年10月18日(日)	10：00～12：00	アンギンでコースターを作ろう！	10人	小学4年生～中学生
4	2027年2月14日(日)	10：00～11：30	昔の道具を使ってみよう① ～いなほがお米になるまで～	10人	小学生～中学生
5	2027年2月28日(日)	10：00～11：30	昔の道具を使ってみよう② ～する道具・つむぐ道具～	15人	小学生～中学生

「昔のくらし展」レビュー

郷土博物館では、小学校３年生の学習「人々のくらしのうつりかわり」に合わせて、毎年「昔のくらし展」を開催しています。2024（令和６）年度、2023（令和５）年度発行の『郷土博物館だより』第 50 号、51 号では、「昔のくらし展」のこだわりポイントとして、部屋の再現の様子を、その設営にまつわるウラ話とともに紹介してきました。

今回は、実際に展示した資料のこだわりポイントを２つ紹介します。

①井戸

井戸枠設置の様子

「昔のくらし展」では、当時の様子を想像しやすいように、展示空間にも工夫をしています。その工夫は、第 50 号、51 号の『郷土博物館だより』で紹介した土間や部屋の再現のほかに、井戸の再現があります。

井戸枠とポンプ部分だけの展示になってしまうと、実際にどう使われていたのかが想像しにくいため、流し場を製作して、その上に井戸とポンプを展示しています。製作した流し場は、できるだけ本物に近づけるようにこだわっています。そのため、見た目だけのハリボテではなく、かなり重量感のあるものになっています。毎年「昔のくらし展」の設営では、大人４人がかりで運んで設置しています。展示全体の中では地味な部分のこだわりですが、来年度の「昔のくらし展」ではぜひ注目してみてください。

②ファミリーコンピュータ

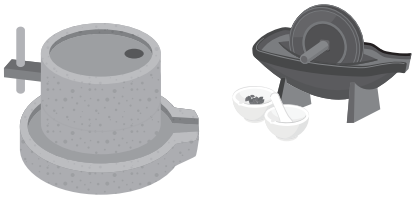
今回展示した「ゲームカセット」

毎年「昔のくらし展」で、我々博物館職員の予想を超えて、一番多く人を惹きつけている資料が「ファミリーコンピュータ」です。一番身近に感じる存在だからでしょうか、特に子どもの食いつきが良い印象です。

この「ファミリーコンピュータ」と一緒に展示している「ゲームカセット」ですが、郷土博物館にはかなりの種類のものが寄贈されています。数多くある種類の中から、担当学芸員が選んで展示するものを決めています。「昔のくらし展」だけでなく、博物館の展示では、展示の前にあらかじめ、何を展示するのかということをしっかりと決めています。しかし「ゲームカセット」だけは、「ゲームカセット」を４～５個展示する、ということだけを決めていて、どの種類の「ゲームカセット」を展示するのか決めていません。担当学芸員は楽しみながら展示する「ゲームカセット」を選んでいます。

来年度の「昔のくらし展」では、どの「ゲームカセット」が選ばれたのか、という部分にも注目してみてください。

令和7年度博物館授業



戸田市立郷土博物館では、毎年市内１２校の全ての小学校から博物館で学習する「博物館授業」を受け入れています。博物館授業では３年生が「昔のくらし」を、６年生が歴史を学習します。どちらの学年も博物館授業で行う内容は二つあって、一つは体験学習、もう一つは調べ学習です。６年生は歴史の授業の最初にあたる古代のくらしの学習として、黒曜石を刃物として使う体験と、２種類の方法での火おこし体験を行います。３年生は、昔のくらしの体験として、薬研と石臼というものをすりつぶして粉にする道具を使います。薬研では各クラスからもちよってもらったみかんの皮を粉にしてもらいます。みかんの皮をよく乾燥させたものは「陳皮」という漢方薬として用いられてきました。七味唐辛子の材料の一つでもあり、小学生にとってもわりあいイメージのしやすい素材の一つです。石臼では最も身近な穀物である米をすりつぶして粉にします。どの体験も非常に限られた時間で行われますが、博物館では学芸員やボランティアの説明で少しでも子どもたちに理解を深めてもらおうと日々工夫をこらしています。

体験学習とともに、常設展示室と特別展示室をつかった調べ学習がもう一つの柱です。

当館の常設展示室は古代から現代に通じる通史展示という形式で構成されています。６年生は歴史の授業ということで、常設展示室で戸田市の歴史を追いながら、古代から現代への流れを把握してもらいます。この学習を手助けするために、６年生の授業では博物館から事前に『常設展示学習サポート』という１２ページの小冊子を配布しています。これは、常設展示における各時代の内容を解説するとともに、それぞれの時代の出来事などを調べて記入できるようにしたものです。

３年生は昔のくらし調べのため、常設展示室のなかでも特に、復元民家と団地のダイニングキッチンコーナーで今の住宅やくらしとの違いや昔の家の特徴などの調べ学習を行っています。また、３年生の博物館授業と関連して実施されている「昔のくらし展」を見学しながら、昔の道具の特徴や今の道具との違いなどを、戸田で使われてきた道具の見学を通して調べます。この学習にあたっては、『はっけん！たいけん！昔の道具調べ隊』という６ページのワークブックを配付しています。子どもたちが気になった道具を自由にイラストで表現できるような欄や感じたことなどをメモできるように作られています。

学校教育におけるＩＣＴ環境の進展に合わせて、『常設展示学習サポート』も『はっけん！たいけん！昔の道具調べ隊』も印刷した冊子を配布すると同時に、データでも配布しています。３年生には「昔のくらし展」で一般の来館者用に配布している解説小冊子も一緒にデータ提供しています。博物館授業で紙を使うか電子を使うかは学校やクラスにお任せしており、展示室で子どもたちがそれぞれのタブレット端末を持ちこんで資料を撮影したりメモを入力したりする姿も珍しくありません。

令和7年度文化財講座

「考古学でみる室町・戦国時代の集落」

2026.1.24（土）

文化財講座は、皆様に市内の文化財を知っていただくとともに、文化財保護の普及を目的に開催しています。今年度の文化財講座は、戸田市でも近年発掘調査事例が増えている室町時代･戦国時代の集落遺跡をテーマとして、２０２６（令和８）年１月２４日に開催しました。

講師にお迎えしたのは葛飾区郷土と天文の博物館学芸員の永越（えいこし） 信吾（しんご）さん、中世の集落遺跡だけでなくかわらけ・ホウロク・木製品などの中世・近世に関連する遺物について多くの論文を執筆されるとともに、中世の集落遺跡についての学術書も刊行されておられる専門家です。講座では普段なかなか聞くことのできないお話をたくさんうかがうことができました。

当日は、実際に戸田市内の中世遺跡から出土した遺物を一部、会場に展示し、参加者の皆さんに見学していただきました。また、会場での受講に参加できない方々にもオンデマンド配信を用意し、多くの方々に受講していただくことができました。

アーカイブズセミナー

「戸田の古文書解読講座（中級編）」

2025.11.22（土）、11.29（土）

２０２５（令和７）年１１月２２日と１１月２９日の２日にわたり、郷土博物館講座室を会場に例年恒例となっているアーカイブズセミナーが実施されました。講師には戸田市立郷土博物館協議会会長である佐藤勝巳（かつみ）氏を迎え、２日間で２６名の市民に参加していただきました。

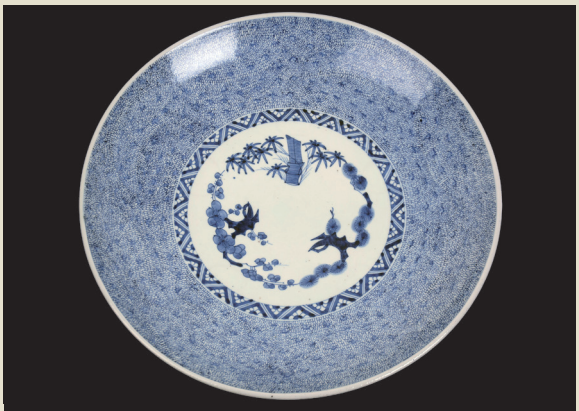
戸田市内に残された江戸時代の古文書を読んでみようというアーカイブズセミナー。今回は、１日目の主なテーマを「三行半（みくだりはん）と通行手形」、２日目のテーマを「鷹場」としました。１日目のテーマである三行半とは、夫から妻への離縁状の江戸時代における俗称です。その本文が３行半で記されたことから呼びならわされた俗称ですが、実際の史料を見るとその文言にも多様さがうかがえます。市内に残された史料にもいくつも見られ、当時の夫婦や社会のあり方を読み取ることができる史料です。２日目は、狩りの獲物である鳥を脅かさないための制限や、鷹の生き餌の餌として集めさせられる虫など、将軍の鷹狩りのために様々な規制を受けていた戸田の人々のくらしをいくつもの史料から読み取ることができました。

「初級編」と題して実施していたこれまでのアーカイブズセミナーでは、文書の形式や書かれている文言についての解説が主でしたが、「中級編」とした今回は、さらにステップアップして参加者の皆さんと古文書本文の中身を読み進めていくスタイルで行われました。少し難度はあがったかもしれませんが、講師の分かりやすい講義で充実したセミナーとなりました。

収蔵庫情報 〈47〉

～染付環状松竹梅微塵唐草文大皿～

この大皿は18～19世紀に肥前国（現在の佐賀県・長崎県）で作られました。絵付はすべて手描きで、皿の中央には松竹梅が、花菱文を挟んで外側には微塵唐草が細かく描きこまれています。同様の意匠構成の皿類は現在まで生産が続いており、制作年代や作り手の違いで絵付の雰囲気が異なるなど、永く人々を楽しませています。



《染付環状松竹梅微塵唐草文大皿》

大皿を用いた食文化の起源は西アジア地域にあり、中国を経由して鎌倉時代以降に日本に伝わりました。ただし、大皿は大変高価だったため権力者しか入手できず、庶民の手に届くのは江戸時代後期のことです。この大皿も戸田で文政期以降名主を務めたお宅に安政６（1859）年に納品されました。

大皿はハレの場で多用され、非日常空間に華を添える役割を担っていたと言えます。この大皿も、戸田で「ザシキビロメ」と呼ばれていた新築披露の宴会用に誂えられました。皿の上にはどのようなごちそうが盛られていたか考えるとわくわくしますね。

当館の『研究紀要』第34号では、本作を含む6点の大皿について、より詳細にご紹介しています。ご興味がございましたら、お手に取っていただけますと幸いです。

令和７年度学芸員実習

2025（令和７）年８月４日から８日までの５日間にわたって、博物館実習を実施しました。博物館実習とは、大学で学芸員資格を取得する課程における必修科目です。多くの大学で学外の博物館での実習を行うこととしており、当館も毎年人数を限って受け入れています。大学では座学の多い実習生たちに実物資料を使った調査方法を経験してもらうほか、当館の業務の一部も体験してもらっています。今回は前年度に受け入れた定杭の碑文を拓本で写し取ってもらいました。石製杭に残された碑文は石の表面が荒くなっていることもあり、読み取れるくらいきれいに拓本を取るのは、実習生には至難の業だったようです。

お詫びと訂正

「郷土博物館だより」第51号（令和７年３月発行）P.6の記事中において、「新曽下町観音経」と記載すべきところを、誤って「新曽新田観音経」と記載してしまいました。新曽下町観音経関係者の皆様にご迷惑をおかけしましたこと、深くお詫び申し上げます。

郷土博物館だより　第52号
■発行：令和８年３月31日　■編集・発行：戸田市立郷土博物館
〒335-0021　埼玉県戸田市大字新曽1707番地　TEL 048-443-5600　FAX 048-442-8988
URL　https://www.city.toda.saitama.jp/soshiki/377/　E-mail
hakubutu@city.toda.saitama.jp印　刷／関東図書株式会社